

1970年日本万国博覧会のカナダ

——新たな国家アイデンティティーの追求——

鈴木 健 司

序

1970年日本万国博覧会（The 1970 Japan World Exposition; Expo '70）は、「人類の進歩と調和」（Progress and Harmony for Mankind）というテーマのもと、日本初およびアジア初の国際博覧会として、大阪・千里丘陵で開催された。海外と国内から100を超えるパビリオンが設置された会場には、3月15日から9月13日まで183日間にわたる会期中に約6422万人が訪れた¹。国際博覧会史上最多の入場者を得たこの国家的イベントは、それから半世紀が過ぎた現在、日本の高度経済成長を象徴とする出来事として歴史に定着している。

この日本万国博覧会の開催が正式に決定された後、他国に先駆けていち早く参加を表明したのはカナダであった。直近の博覧会となるモントリオール博覧会の開催国であるカナダから日本が学ぶところは多く、日本万国博覧会に関わる組織運営と事業実施にカナダが与えた影響は多大であった。また、国家としての参加に加え、オンタリオ州、ケベック州、ブリティッシュ・コロンビア州も独自に出展しており、日加両国の経済関係が深まるなか、当時のカナダは連邦と州の両方のレベルでこの博覧会に並々ならぬ期待を寄せていた。日本万国博覧会におけるカナダの存在感が多大であったことを、当時の史料は語る。

しかし、日本万国博覧会について多くのことが語り継がれるなかで、この博覧会でカナダが重要な役割を果たし、またカナダ自身にとってもそれが重要な意味を持つものであったことは、一般には等閑に付されている。この博

覧会を振り返るとき、典型的な描写は、例えば次のようなものであろう。「会場は宇宙技術、コンピューター、原子力等の最先端テクノロジーであふれ、最新製品のショールームの場として、電気自転車、電気自動車、携帯電話、テレビ電話、モノレール、リニアモーターカー等がお披露目された。330 ha に及ぶ広大な敷地には118のパビリオンが林立し、アポロ計画を中心に展示され『月の石』が人気を博したアメリカ館、高さ80メートルの吹抜け全体を使い宇宙ゾーンを展開したソ連館等、人気パビリオンには数時間待ちの長い行列ができた」²。これは大阪府の公式文書からの引用であるが、一般の万博関連書籍等でも大同小異である。入場者数で見れば、カナダ館（2503万5千人）はソ連館（2800万人）に次ぐ2位であり、3位のアメリカ館（1650万人）を凌いでいるが、人口に膾炙して伝説化しているこれらの外国館とは対照的に、カナダは忘却の彼方に置かれがちと言ってよい。

万国博覧会は学術研究の対象として認知を高めており、多数の優れた成果が存在する³。しかし、万国博の研究は「日本のみならず各国において、それぞれ自国が開催、または参加した経緯に目が向けられるのが常套であり、意外にも国際性を欠いた研究傾向が強かった」⁴と研究者は指摘する。1970年日本万国博についても例外ではなく、その計画から実現に至る過程の検証をはじめ多角的な考察が蓄積されているが、その議論は主として日本国内の問題に限定される。国内資料の発掘や関係者への聞き取りを通して歴史的検証を進めることなどはその一つである⁵。一方、この博覧会に関する諸外国の事情に目が向けられることは少ない。前開催国としてのカナダの役割が注目されることはあっても、視点は常に日本にあり、日本万国博がカナダの文脈から論じられることは稀である。

日本万国博を支えたカナダの側にはいかなる歴史的背景が存在したのか。1960年代のカナダは、事実上の建国となる1867年の連邦結成から100年を迎えてナショナリズムが高揚していた。祝祭的な活気に包まれつつ、カナダは1965年にメープルリーフの国旗を制定し、1967年にはモンリオール万国博

覧会（The 1967 International and Universal Exposition; Expo '67）を成功させた。1969年には公用語法を制定して英語とフランス語を公用語とする二言語主義を実現し、1971年には多文化主義を政策として採用した。「建国二民族」の言語を軸としつつ多様性の尊重を国是とすることにより、現代に至る社会的基盤と国民的価値を確立した時代であり、日本とは異なる意味で飛躍的發展期であった。

このような時期に開催されたモントリオール万国博は、カナダのアイデンティティー形成過程の重要な鍵となる事象であり、カナダ史上の重要事項である⁶。カナダが日本万国博への参加を表明したのは、そのモントリオール博開催前年の1966年である。当時は日本の経済成長を背景に両国の経済関係が急速に深化し、カナダにとって日本の重要性は増大しつつあった。さらには、連邦結成から2世紀目を迎えて新たな国家像を模索するカナダにとって、アジア太平洋地域への進出は重要課題であり、日本万国博への注力はその一環でもあった。

日本万国博が開催された1970年は、カナダ史においては、ケベック独立を目指す急進派組織が州閣僚を誘拐して殺害した「十月危機」によって記憶される。国際関係に目を向ければ、カナダは同年10月にアメリカに先駆けて北京の中華人民共和国と正式に国交を樹立しており、対中関係の大転換が実現した年である。当時の対日関係はアジア外交の主要課題として注目を集めていたが、激動の1970年が終わると相対的に影が薄くなり、日本万国博もカナダ史の中では動乱の中に埋没している。

本稿の目的は、日本万国博覧会においてカナダが果たした役割を再確認するとともに、そのカナダにとっての意義を考察することにある。ここではそのような問題意識をふまえ、博覧会の公式記録及び当時のカナダと日本のメディア報道をもとに事実関係を整理、構築する。この主題に直接関わるモントリオール万国博及びカナダの太平洋地域進出についても言及しつつ、カナダの日本万国博への積極的関与の様相を検証する。

1970年日本万国博覧会は、博覧会国際事務局の承認を受け国際博覧会条約に則り開催された国際博覧会（universal exposition）である。現代では「万博」と呼び習わされるが、当時は政府、民間を問わず「万国博」という語が用いられることが通例であった⁷。また、日本が国際博覧会の開催を重ねる前のことであり、「大阪万博」という通称も現代のように一般的ではなかった。万博研究の分野では現代的呼称が多く用いられるが、本稿ではカナダ史の視点から当時の事情に忠実に記述することを重視し、原則として当時の通例に倣い「万国博」「日本万国博」の語を用いる。

1 日本万国博におけるカナダのイニシアチブ

(1) 序説

1851年にロンドンで開催された「世界の産業の大博覧会」を皮切りに、世界各地で国際博覧会が開催されるようになった。20世紀になり、これらの催事に関する条約整備の必要性が提起され、国際博覧会条約が1931年に制定された。その管理を目的として設立された博覧会国際事務局が、同条約の執行機関として、現在に至るまで最大規模の国際機関の一つとして機能している⁸。

日本は1965年2月8日、国際博覧会条約の議定書に調印して、世界で32番目の加盟国となった⁹。4月22日には1970年に大阪府の千里丘陵で万国博覧会を実施することを申請し、1958年ブリュッセル、1967年モントリオールに続き戦後3回目となる第一種大規模博覧会の開催が、9月14日に正式に決定された。日本は1862年第2回ロンドン万国博に初参加した後、自国開催の機会を模索しており、1940年には「皇紀（紀元）二千六百年」奉祝行事としての国際博覧会を計画していたものの戦時中のため「延期」した過去がある。1970年大阪は、国際社会に復帰してようやく実現した博覧会であった。万国博覧会に開催都市名を冠する通例に反して「日本万国博覧会」の名称を採用したのは、「30年前に実現されるはずであった『日本万国博覧会』の復活版

であったことを示唆している」¹⁰とされる。

1970年日本万国博の実施にあたって、カナダは企画段階から最も深くその運営に関与し寄与した外国であった。開催当時、最も大きな注目を集めた国の一つでもあった。その事実はいくつかの観点から振り返ることができる。

(2) 諸外国の先導者として

第一に、カナダがこの博覧会を重視しその成功のため積極的に貢献してきたことは、最初から徹底して準備段階での「一番乗り」を実現してきた事実からうかがえる¹¹。そしてそのことが一般の注目を集める結果にもつながった。

万国博開催の正式決定後、日本政府は1966年9月に133か国と24国際機構に対して招請状を発送した。早くもその翌月10月7日に、カナダは最初の参加決定国となっている。オタワで開かれた第4回日加閣僚委員会で、日本側が博覧会の概要説明を行ってカナダの積極的な参加を強く要望し、これをカナダ政府が受諾する形で参加決定が発表された。日加共同声明の12項目中11番目に、カナダの日本万国博への参加は挙げられている¹²。

カナダ政府は1967年8月1日、博覧会への出展契約も一番に完了した。この時期までに12の外国政府と24の日本企業が参加を申請していたが、これらに先駆けて出展契約の正式な調印を行ったものである。この調印式の席上で、カナダ館は「鏡の殿堂」と称して「発見」(Discovery)をテーマに展示を行うという具体的な構想が、早くも発表されている。

パビリオンの着工も外国政府館としては最も早く、翌年のカナダ・デー(建国記念日)である1968年7月1日に開始された。起工式は駐日カナダ大使などの出席のもと、神式で行われた。8月20日には、カナダ館の建築資材として木材1500トンなどがリベリアの貨物船で大阪港に到着した。外国政府館の資材が海外から持ち込まれたのはこれが最初であった。建築工事は順調に進められ、翌1969年4月には日加閣僚委員会のため来日した5人の閣僚が

大阪府知事の案内によって会場の視察を行っている。1969年10月21日にはカナダ館が完成し、会場全体で最初に完成したパビリオンとなった。

パビリオン建設の開始とほぼ同時期に、そこで働く人材確保も開始されている。カナダ国内では1968年5月に12の職種の求人が開始され、日本語話者160人を含む800人が応募した¹³。カナダ人スタッフには英語、フランス語、日本語を基本として多言語に通じた人材が選抜され、オタワの日本大使館員による日本語レッスンが施された。日本では6月30日にカナダ館ガイドの募集が開始され、長期にわたる審査の結果、英語に堪能な16名の若い女性を選考された。その後、彼女らには博覧会開幕に備えて5週間に及ぶカナダ現地研修の機会が与えられている。

準備進捗の一連の経過の多くは、日加両国のメディアでその都度取り上げられた。万国博開催を翌年に控えた1969年新春にNHKが放映したテレビ番組「万国博がやってくる」では、いち早く着工したカナダ館の棟上げ式を記念する日本とカナダの子どもたちの交歓の様子が会場から中継された¹⁴。このように、博覧会の開幕が近づくことを告げる報道の多くには、カナダの存在が付いて回った。カナダ政府 Expo'70 委員会は、日本万国博参加決定からガイド決定まで常に先頭を独走する自国について「たえず、ほかの参加国、参加企業の推進力となっている」¹⁵と自己評価している。

日本万国博には、最終的には史上最多の77か国が参加する盛況を見せたものの、当初は建築費用の高さや賦課金への不満などが原因となり、外国政府からの参加希望は低調であった。また、国内の大企業も博覧会の広告効果を高く評価しておらず、出展には概して消極的であった¹⁶。このような状況下でカナダはまさに先導者の役割を果たしたので、カナダ政府 Expo'70 委員会による前述の分析は決して過大評価とは言えない。

(3) 前博覧会の開催国として

第二に、カナダの日本万国博覧会との強い関わりは、日本万国博がその基

本理念とテーマの設定においてモントリオール万国博の影響を強く受けている事実に見出すことができる。国際博覧会条約は第4条で博覧会の開催頻度について定めており、1948年改正により、第一種一般博覧会は異なる地域であれば2年間の間隔を空ければ開催できるようになっていた。このため日本万国博覧会は、モントリオール博のわずか3年後に同じ第一種一般博覧会として開催されることになり、結果として、理念の設計などに関する重要な部分をモントリオール博に依拠することとなった¹⁷。

産業革命の只中であつた19世紀以降、国際博覧会は産業主義を具現化することを目的として発展してきたが、20世紀になると二度の世界大戦を経てその性格は徐々に変容し、エンターテインメントとしての要素を強めながらも人類が直面する諸問題を喚起して思考を促すことが主調となった。さらに、かつては顕著であつた帝国主義的、植民地主義的な展示からの脱却という方向性も明確になっていく。博覧会の基本テーマは、1958年のブリュッセル博の「科学技術とヒューマニズム」、1962年シアトル博の「宇宙時代の人類」といった限定的な視点からの主題に対して、モントリオール博では「人間と世界」という包括的な主題が設定された。日本万国博でも、その延長上で、かつ新しい問題意識に基づく基本テーマと、そのメッセージを展示内容に反映させるための仕組みが不可欠であつた。

日本万国博で基本テーマが確定するまでの過程については、複数の先行研究により詳細に明らかにされている¹⁸。それらは次のように概括できるだろう。日本政府が組織した日本万国博の準備委員会の下部組織であるテーマ委員会では、世界の現状に関する危機意識は「不調和」という語で表され、それを人類の知恵で乗り越えるということが基本的概念となった。しかし、「人類とその知恵」ではモントリオール博の「人間と世界」に酷似することになるため、副委員長の桑原武夫の提案により「人類の進歩と調和」に決定した。結果として、不調和を解決するという根幹の問題意識よりも「進歩」が強い印象を与えることとなった。

モントリオール万国博は、基本テーマを設定したうえでその下にサブ・テーマの枠組みを設け、サブテーマごとにテーマ館をつくり、展示物や映像によりその理念を表現した。主催国の主導下に設置されるテーマ館に参加国はテーマに関わる展示物を提供し、自国の展示においてもテーマに則した展示を行うことが求められた。展示に関するこのような基本設計は、日本万国博でも踏襲されている。日本万国博では「人類の進歩と調和」というテーマの下、「より豊かな生命の充実を」「より実りの多い自然の利用を」「より好ましい生活の設計を」「より深い相互の理解を」という4つのサブ・テーマが掲げられた。

モントリオール万国博の重要な特徴の一つとして、1950年代までの国際博覧会で一般的であった植民地展示の希薄化に努めたことが挙げられる。直近のブリュッセル博は、ベルギーが植民地支配していたコンゴの人々を柵で囲って「展示」するなど、植民地主義の性格を色濃く残していた。これを改めたモントリオール博からさらに進んで日本万国博では、植民地関連に代わる出展物の分類・展示体系として「諸民族の文化—民族文化—民族の生活」という項目が新設された。

このように、日本万国博はモントリオール博に倣うことにより、戦後の国際博覧会に当然に求められるメッセージ性を獲得し、展示の基本方針を確立した。ただし、モントリオール博でテーマに込められた精神性が日本万国博では必ずしも十分に具現化されたとは言えない。その点については後述する。

(4) 実務的リーダーとして

第三に、カナダの日本万国博覧会への実質的貢献は、カナダ政府代表のパトリック・リード (Patrick Reid) が、博覧会の参加国代表者会議と運営委員会において強力な指導力を発揮したことによるところが大きい。彼の働きにより、日本万国博覧会へのカナダのイニシアチブは、可視的な面での話題提供にとどまらず、むしろ舞台裏の運営実務に関わるところで、強く認識さ

れることとなった。

アイルランド出身のリードは、1955年にカナダに移住して広告業に従事し、1962年からはカナダ政府で勤務した。モントリオール博でカナダ政府代表を務めたほか、展示委員会ディレクターとして1968年テキサス州サンアントニオで開催のヘミス・フェア世界博覧会、ミラノで開催されたミラノ・トリエンナーレを担当しており、国際博覧会の現場運営に豊富な経験を有していた¹⁹。

日本万国博の参加国政府代表者会議は、1968年5月に京都・国際会館で開催された第1回会議において、参加国が増えた段階で次回会議を開き運営委員会を設置することで合意していた。これを受けて同年11月に開かれた第2回会議において、リード・カナダ政府代表を議長とすることを、ベルギー政府代表が提案し、萩原徹議長（日本政府代表）も同意して、本人がこれを受諾した²⁰。

運営委員会における検討事項は会場設営全般にわたり、出品許可、商業利権、労働契約、保険契約、宣伝広告など多岐に及ぶ事項の中には、国際博覧会に関わるノウハウを持たない日本にとって認識外の問題も少なからず含まれていた。参加国間で見解の相違や利害の衝突もあるなかで、経験豊富なリードは巧みに議論を捌き、前開催国の立場から先例を引きつつ日本に有益な助言を与えた²¹。

(5) カナダの優越

以上のようなカナダのイニシアチブに対して、日本政府はカナダに明確な形で謝意を評している。カナダ閣僚は1969年4月に訪日し、大阪の万国博覧会敷地を視察した。この際に行われた第5回日加閣僚委員会の共同声明では、「日本側閣僚は、カナダによる大規模な参加と協力に対し感謝を表明した（傍点は筆者）」²²ことが明記されている。

参加準備のすべてを早期に進め、積極的に関与を深めたことは、カナダに

とって好ましい結果をもたらした。外国政府の参加がまだ十数か国に留まっていた1967年夏の段階で、カナダ館の敷地は会場のランドマークである「太陽の塔」の西方、中央口から北口まで帯状に伸びるシンボルゾーンから1ブロックの位置に確保された。博覧会の呼び物の一つである「動く歩道」の出口がカナダ館の前となるように設置されたので、中央口から入場してこれに乗った来場者にとっては最寄り出口がカナダ館となった。

カナダ館への厚遇は、天皇皇后が臨場の際に訪問する唯一の外国館に選ばれたという点でも顕著である。開会式に出席した天皇皇后は、エキスポタワーの展望台から会場を眺望し、モノレールで会場を一周した後、テーマ館、カナダ館、日本館の順に見学した。カナダ館が選択された理由について、公式記録は、カナダが「前回の万国博開催国として常に参加各国を代表し、また参加表明も第1番である等を考慮して決定された」²³と明記している。

完成が早かったこともあり、カナダ館への注目度の高さは当初から上々であった。全面ガラス張りによるユニークな造形を持つカナダ館を、当時のカナダメディアは「最も多く写真に撮られた」建物として報じている²⁴。数ある参加国の中でも傑出した注目を集めるなか、カナダは自信と期待に満ちて日本万国博の開幕を迎えることになるのである。

2 先駆けとしてのモントリオール万国博

(1) テーマとその背景

1970年日本万国博覧会は、単にカナダが深く関与したというだけでなく、理念や形態の基本設計に関わる面でも多くをカナダの先例に倣っており、モントリオール万国博の申し子と言える。多くの点で日本万国博のモデルとなったモントリオール万国博は、「人間とその世界」(Man and His World)をテーマとして1967年4月28日から10月27日まで開催された。カナダの人文学者や科学者が叡智を集め、アントワヌ・ド・サン・テグジュペリ(Antoine de Saint-Exupéry)の傑作『人間の土地』(Terre des Hommes)

に着想を得て提案したこのテーマを、博覧会国際事務局は熱烈に支持した²⁵と伝えられる。東西冷戦と南北問題が国際関係の主要な課題となり、国家間、人種間、あるいはイデオロギー間の対立が注目される時代にあつて、それは世界の問題意識を的確に象徴していた。また同時に、カナダ自身の状況を反映してもいた。

1967年はカナダの連邦結成から100周年であり、モンリオール万国博はその記念事業としての性格を強く持った。1867年に連邦結成と同時に自治領となったカナダは、1931年に独立国家の地位を獲得し、第二次世界大戦後には独自の市民権法を制定してイギリスからの法的・政治的独立を確かなものとしていたが、民族意識から解放された独自の国民的アイデンティティーの創出という点ではなお課題を残していた。モンリオールが位置するケベック州では、1960年に自由党政権誕生に伴い「静かな革命」と呼ばれる近代化運動が起こり、ユニオン・ナショナル党とカトリック教会に主導される保守的なフランス系カナダ人の民族意識に代わる新たなケベック・ナショナリズムが台頭した。カナダ政府は、「建国の二民族」であるフランス系とイギリス系の連邦における対等な地位を保障すべく、1963年には二言語・二文化委員会を組織して英語とフランス語の公用語化を模索した。また1965年にはカナダの国民的アイデンティティーの象徴として公募デザインを基にしたメープルリーフ国旗の採用を決定している。

このようにカナダの1960年代は国民統合の実質を推進するための歩みとともにあり、万国博覧会はその巨大な象徴であった。カナダに博覧会を誘致する計画は、ブリュッセル博が開催された1958年に始まり、トロント市はこれに無関心であったが、モンリオール市の協力を得て1962年に成功をみた。博覧会純経費は、1963年1月18日付カナダ政府、ケベック州政府、モンリオール市の三者協定の条件に基づき、カナダ政府50%、ケベック州政府37.5%、モンリオール市12.5%の割合で配分されることとなった²⁶。

カナダの文学者ジョージ・パワリングは、彼方此方に新国旗が翻り、博覧

会テーマソング「カナダ（100周年の歌）」（Canada—The Centennial Song）が流れていた当時を振り返り、1967年の到来は「愛国心をめぐる全くカナダらしからぬ馬鹿騒ぎ」に包まれ「1960年代後半にはカナダ文化の大波が立った」²⁷と述べている。市民のナショナリズムを通じてカナダ統一を促進することは、ピアソン首相の第一の目標であった²⁸。モントリオール万国博はその一翼を担った。

基本テーマと展示の関係について、博覧会の公式発表は次のように説明する。「『人間と世界』というテーマは、20世紀の人間至上主義（humanism）を芸術、化学、哲学における人類の発展を完全に統合された形で提示することにより、刺激的に描写するものである。その全体は人間のコミュニティーに属するという感覚と人類は基本的に一つであるという意識に満ち溢れている」²⁹。「人間と世界」という基本テーマは、「創造者としての人間（Man the Creator）」「共同体における人間（Man in the Community）」「探検者としての人間（Man the Explorer）」「生産者としての人間（Man the Producer）」「供給者としての人間（Man the Provider）」といった多くのサブ・テーマによって具現化された。それぞれについてテーマ館が建設され、参加国はそこに展示品を提供することにより貢献した。例えば、日本は「創造者としての人間」のテーマ館に、京都の玉蔵院、法金剛院、六波羅蜜寺、天寧寺、東京国立博物館、和歌山の大伝法院などから提供された美術品を提供している³⁰。その他、工業デザイン館や彫刻館といった建物にも日本の作品が展示された³¹。各国のパビリオンでも基本テーマとの関連は当然重視されたが、日本はそこで批判を浴びる。

(2) 日本館への批判

モントリオール万国博の日本への参加要請は、1963年1月、在日カナダ大使を通じて行われた。日本は当初、時期尚早であるとして態度を保留していたが、1964年に博覧会総裁の来日や日加閣僚委員会での積極的な参加要請が

あったことなどを受けて、同年11月4日の閣議了解により公式参加を決定した³²。

3つの島から成る会場敷地のうち、日本館はセント・ヘレナ島に建設された。全体のテーマとして「進歩する日本 (Japan in Progress)」を掲げ、3つのサブテーマ「自然との調和 (Harmony with Nature)」「伝統との調和 (Harmony with Tradition)」「科学技術の発展との調和 (Harmony with Technological Advance)」を基に展示を各階に分ける構成が採られた³³。

コンクリートの梁を丸太のように格子状に組み合わせた建物は建築の見地から高く評価され、展示物も英語を入力すると日本語で発話する言語翻訳機や実用化間近と謳われたテレビ電話などは好評であった³⁴。7月12日に高松宮宣仁親王夫妻が会場を訪れ、数百人の日系カナダ人をはじめとする一般の人々と寛いだ雰囲気交流したことは、この博覧会の「最も成功したナショナル・デー」を盛り上げた³⁵。日本が翌年で開国100周年を迎えることを、宣仁親王が英語で語り親王妃がフランス語で通訳したことは、2000人の聴衆の喝采を受けた³⁶。モントリオール博で日本が最も称賛された瞬間であった。

博覧会の行事の一つとして世界各国が伝統芸能を披露したワールド・フェスティバルでは、日本は8月3日から10日間にわたって、モントリオール市内のメゾヌーブ劇場において歌舞伎公演を行っている。「勸進帳」「隅田川」などの代表的レパートリーが連日観客を魅了し、興行的にも全席売り切れとなる成功を収めた³⁷。カナダメディアは「最も西欧的な観衆でさえも、歌舞伎の色彩や立ち居振る舞い、洗練された様式美に歓喜しないことはありえない」と評している³⁸。

しかし、会期中全体を通してみれば、日本館は概して不評であり、不人気というより明らかに評判が悪かった。その理由は、展示が過度な商業主義に彩られていたことにある。自動車、オートバイ、トランジスタラジオ、カラーテレビ、カメラ、コンピュータ、テープレコーダー、リモコン、電子顕微鏡などが並べられた展示は、さながらメイド・イン・ジャパン商品の「見

本市」³⁹であった。日本庭園では生花の実演や茶道の点前披露が行われ、レストランでは焼き鳥と天ぷらが供されてはいたが、それを除けば伝統的な事物は皆無で、特別の催し以外では着物さえ見ることができなかった。着物を着用しないのは、仕事着として機能的でないという合理的な理由によるものであったが、伝統文化に関して淡泊な日本館の有り様は来場者の不満を生んだ。

このような不評について、日本館関係者は「現代の日本を見せたいのであって、博物館をつくりたいわけではない」⁴⁰と反駁している。「進歩する日本」を基本テーマとして掲げた日本にとっては、ステレオタイプのな日本文化への期待こそ場違いとの意識が強かったかもしれない。しかし、モントリオール博の基調に照らせば、日本の姿勢が商業主義に偏向していたことは否めない。日本館の実情は「戦後の日本がいかに近代化し進歩したかを世界に示さなくてはという強迫観念」⁴¹を示すものと受け止められた。

日本館に対する酷評は、現地を訪れた日本人にも共通していた。博覧会開幕から3か月が経過した7月初頭には、新聞のコラムが次のように伝えている。「モントリオール万国博の日本館の評判がよくない。それを見てきた人が、くちうらを合わせたように批判している。中には日本館の展示を見て憤激と恥辱に赤くなり、がっかりしたと、はげしい調子でレポートを書いている人もいる」⁴²。7月中旬には、博覧会を視察した外務省高官が、「人間と世界」というテーマを具現化している他国のパビリオンを引き合いに出して日本館の商業主義的な展示を批判した⁴³。例えば、スイスは「時間」、ドイツは「機械」といった人間の文明を象徴するテーマと関連付けて魅力的な展示を実現しているのに対し、日本にはそのような工夫がない、というものである。

内外からの批判を日本政府も看過できず、8月になると佐藤栄作首相は、通商産業省に日本貿易振興会と協働して展示内容を改善するよう指示した⁴⁴。8月末からは、日本館女性スタッフは洋服に代えて着物を着用するとともに、

日本女性による着物ファッションショーが行われた⁴⁵。会期末となる9月14日に坂本九が日本館で昼夜2回公演を行い、全米チャート1位となった「SUKIYAKI」や1970年日本万国博のテーマソング「世界の国からこんにちは」を披露したことは来場者を喜ばせたが、「遅きに失した」⁴⁶と評された。

このようにカナダメディアは、会期中を通じて、モンリオール博における日本館を「失望 (disappointment)」のような否定的な語を用いて報じることが多かった。日本館の展示は「進歩する日本」という自国館のテーマに則してはいたが、博覧会の基本テーマである「人間と世界」に鑑みれば利己的姿勢が強すぎた。結果として日本は、万国博覧会がもはや産業博覧会ではなく、娯乐的でありながらも世界の現状や人類が直面する問題を考察するための場に性格を変えている事実を次回開催国として正しく理解しているのかどうか、諸外国に疑念を抱かせることとなった。

興味深いのは、日本館の展示企画の中心的役割を担った日本貿易振興会 (JETRO) が、日本館の不評を専ら日本国内限定の特殊な反応として矮小化していることである。日本貿易振興会による参加報告書には次のように記されている。「日本館に対する現地での評判は上々で、『見本市的』、『コマージュリズムが強すぎる』、等々の日本での批判も『東京電』として現地新聞紙上に報道されることもあった。これを知った現地の報道関係者らから『どうして日本では評判が悪いのか』と聞かれ現地事務局が返答に窮したというのが実情であった」⁴⁷。そして、日本館の建築の美しさや言語翻訳機、テレビ電話など工業製品の優秀さを称賛するカナダ現地紙の記事を引用することで、日本館の成功の証左としている。実際には、先述のとおり、「見本市的」「商業主義的」といった批判の多くは、日本からの評価とは関わりなくカナダから発していた。そして、それらの批判は、日本館の建築や個々の展示品の機能、伝統文化の粋には大いに驚嘆したうえで、展示全体の理念や精神性の乏しさに向けられていたのである。しかし、そのような事実には参加報告書では言及されず、反省点としては、観客の収容力に限度があり連日長

蛇の列ができたことが挙げられるにとどまっている⁴⁸。

カナダメディアは、次回開催国としての日本に早くから注目した。入場者の動線や係員の外国人対応など会場内の実情から観光客の宿泊場所に至るまで、日本からの視察団が詳細な現地調査を行って、モンリオール博を「学びの場」として活用している様子も報じられている⁴⁹。閉幕後には、モンリオール博を総括しつつ日本万国博を展望する論評が見られるようになる。日本の商業主義に対する批判と警告は止まず、大阪が元来商都であることや、日本企業が自社製品の展示以外に関心を持ち無私で活動する伝統を欠くことが、次回博覧会への懸念材料として指摘された⁵⁰。

(3) モントリオールから大阪へ

モンリオール万国博で日本館を設計した建築家の芦原義信は、日本のアート系雑誌で、博覧会のテーマや展示内容が明確に設定されない段階での建築設計であったことを振り返り、「今後は展示内容と建築が一体化されて設計されていくべきである⁵¹」との持論を述べている。博覧会会期中に刊行された号で、この見解と日本館の不評の高まりとの前後関係は不明であるが、テーマへの意識が不在のまま建築と展示の準備が進められることの問題視は、内外からの批判とも整合するものである。しかし、そのような問題意識が3年後の準備に向けて十分に共有されたとは言えない。

日本万国博で総合プロデューサーを務めることが決定していた建築家の丹下健三は、同じ雑誌のインタビュー記事で、モンリオール博で最も注力されているのは一連のテーマ館であるとの印象を披露し、それらが「ただ分散的に配置されていて、全体としての印象は希薄⁵²」という、控えめながら否定的な感想を述べている。さらに、島を会場として開催されたモンリオール博で水が全体を統一する道具になっていることを指摘したうえで、立地条件の異なる大阪では「基幹施設」という概念を重視することについて、「モンリオールとは違った形で全体をユニファイしていこう、という一つの気

持の表れ』⁵³と説明している。丹下はこのようにモントリオール博とは異なる発想によって「お祭り広場」を設計し、それは岡本太郎の「太陽の塔」とともに核となってシンボル・ゾーンを構成した。

テーマ委員会では議論の末に「人類の進歩と調和」という基本テーマが考案されたものの、その後の会場プロデュースの現場でそれを具体的な建築や展示に結びつける段階では、それはきわめて漠然とした意味しか持たないことになった。サブ・テーマは「〈第1主題〉より豊かな生命の充実を」「〈第2主題〉より実りの多い自然の利用を」「〈第3主題〉より好ましい生活の設計を」「〈第4主題〉より深い相互の理解を」という形で掲げられたが、モントリオール博とは異なり、それらが個別の建物や展示により具現化されることはなかった。テーマ館は「太陽の塔」一つに集約され、テーマの強調よりはシンボル・ゾーンを中心に博覧会を祝祭的性格の濃いイベントとして展開していくことに関心が向けられた。この過程を検証した吉見俊哉は次のように総括する。「基本理念は『お題目』、統一テーマは『キャッチフレーズ』にとどまり、サブ・テーマは『換骨奪胎』されていった。むしろ、実際の万博会場やモニュメント、パビリオンのプロデュースは、東京オリンピックの鮮明な記憶に準拠しながら、国民的な『お祭り』として演出されていく方向が支配的となっていった」⁵⁴。

モントリオール万国博は、次の開催国である日本にとっては時宜に叶った博覧会の在り方を示す先駆けとなるものであったが、そこで打ち出された高邁な理念と展示の関係が十分に継承されることはなかった。一方、新しい時代の国民統合に成功していることを自国開催の万国博覧会を通じて世界に示したカナダは、3年後の日本でもその再現を試みることになる。

3 太平洋を向くカナダ

(1) 独自外交路線の追求

カナダの日本万国博覧会への積極的関与は、無論、前開催国としての世話

焼きによるものではなく、アジア太平洋地域におけるプレゼンス増大を図ろうとする自国の事情に起因している。モントリオール博では、その努力は専ら展示を通じてカナダ社会の多元性と統一性を表現することに向けられていたが、外国としての参加となる日本万国博では、国際社会におけるカナダの新しいベクトルを明確に示すことに力点が置かれた。

その背景には、カナダが国際社会における自国の位置と役割を絶えず模索してきた歴史がある。第二次大戦中、カナダは連合国屈指の軍事力をもって貢献しながらも、大国主導による国際秩序の形成には関与できなかった。この経験はカナダを、大国ではないが新興国とは一線を画した「ミドル・パワー」としての役割の追求に向かわせた。冷戦の中で1956年のスエズ危機においてレスター・ピアソン (Lester Pearson, 1897-1972) 外相が国連平和維持軍の創設を提唱してノーベル平和賞を獲得するなど、カナダは大国政治の間隙を縫って影響力を行使することに成功した。友好関係にある隣国アメリカとの意見の衝突を厭わず、首相就任後のピアソンが訪米時にアメリカがベトナムから撤退すべきとの立場を示唆する演説を行いジョンソン大統領を激怒させたことは、広く知られている。

1968年にはピエール・トルドー (Pierre Elliott Trudeau, 1919-2000) が首相に就任し、国際関係に関する加米両国の見解の相違は顕在化した。トルドーのアメリカ観と外交観は、インタビューにおける次の発言に端的に表れている。「我々は、カナダがアメリカとの良好な関係から利益を得ていることが、アメリカによる経済支配につながらないように注意を払う必要がある。そのようなことになれば次には政治的独立が萎縮することになる。国際関係についても同じように考えなければならない」⁵⁵。政界に身を投じる前は次のようにも述べていた。「カナダの外交政策の70パーセントは加米関係で決まる。外務省は残りの30パーセントのカナダの戦略の自由を最大化するよう働かなければならない」⁵⁶。カナダの独立性を高めることを重視したトルドーは、NATO 離脱を検討し、冷戦の枠組みにおけるカナダの新たな位置を模

索した。アメリカより早く1970年10月に北京の中華人民共和国を承認したことは、カナダの独自外交の代表的事例である⁵⁷。

トルドーの外交政策の新機軸の一つは、北大西洋を中心とする外交の軸足を太平洋地域に移すことであった。トルドー内閣は外交政策に関する白書を1970年6月25日に発表し、太平洋に一章を割いた。そこでは、地域の4強であるアメリカ、中国、ソ連、日本のより安定的で受容可能な勢力均衡を主要課題として位置付け、小国の役割進化と利害衝突を考慮に入れることの必要性を説いている⁵⁸。欧米偏重を脱してアジア外交を強化することは、国際政治におけるカナダの位置や新たな国家アイデンティティーの確立といった大局的な目的に加え、経済的にも重要と考えられた。

とりわけ重視されたのは、経済発展著しい日本との関係である。日本との貿易額は1967年で8億7700万ドルに上り、イギリスに代わり第2位の貿易相手国となることが予測されていた⁵⁹。1970年、地域内の経済交流や資源開発について討議する財界人の国際的会合である太平洋経済委員会の第3回総会のため来日したカナダ代表は、日加貿易が5年後には2倍になるとの見通しや、カナダ経済が加工度の高い商品生産の方向へと体質改善を目指している状況を述べている⁶⁰。日加経済関係が深まる中、日本からの投資により石炭や石油などの天然資源の開発が進むことを、資本を求めていた西部諸州は歓迎した⁶¹。一方で、カナダ経済が日本資本に支配されることへの警戒も強まっており、カナダ産業の犠牲のもとに日本経済を潤すことへの嫌悪も生じていた⁶²。カナダにとっては貿易と投資に関する障壁を打開して日本市場への進出を進めることは喫緊の課題であった。そこで問題となるのが、日本及びアジア全体においてカナダの存在感が英米に比べれば皆無に等しいことである⁶³。カナダが日本万国博覧会への参加を積極的に推進したのは、まさにこのような時期であった。

(2) トルドーの太平洋諸国歴訪と日加首脳会談

博覧会期間中にカナダのナショナル・デーとして定められた5月27日にトルドーが公式の賓客として訪日することは、すでに確定していた。ナショナル・デーとは「参加国の文化、生活、習慣等の理解を深め、国際親善に役立つものであり、このため第1種万国博覧会では、参加国がナショナル・デーを設けてその参加を強調することが伝統となっている」⁶⁴。これに基づき、日本万国博覧会協会は、各国が平日の一日をナショナル・デーとして設定し、お祭り広場または万国博ホールを会場として式典および催し物を各開催国の経費負担により実施することを希望する旨を表明した。

これとともに貴賓の接遇に関する基本方針としては、「国の元首、その夫人またはその名代およびその夫人および国際機関の長およびその夫人にして、日本政府の招待により訪日するもの」を「日本政府の賓客」と称し、「貴賓が万国博覧会をそのナショナル・デーまたはスペシャル・デーに訪問するに当り、その訪問は公式となる」⁶⁵ことが定められていた。カナダ政府は、首相のこの訪日を太平洋諸国歴訪の旅程へと拡大した。その詳細は表1のとおりである。

表1 トルドーの太平洋諸国歴訪日程

1970年5月10日 カナダ出発 — 5月12日 ニュージーランド — 5月15日
オーストラリア — 5月20日 マレーシア — 5月22日 シンガポール — 5
月23日 香港 — 5月25日 日本（東京・大阪・京都・東京） — 5月29日
帰着

Ottawa Citizen, May 8, 1970, p. 6 などより作成

この時期、政治的に最大の懸案は中国承認をめぐる問題であったが、台湾を刺激することを避けるため、北京訪問は見送られている。トルドーは、まずニュージーランドとオーストラリアで二国間貿易に関する協議で成果を上げ、その後も旅程に従い諸国訪問を続けた。

注目されたのは、シンガポールにおけるリー・クアンユー首相との会談で

の発言である。1970年代初頭のアジア太平洋地域では、重大な軍事的な変化が予測されていた。第二次世界大戦後シンガポールに拠点を置いて活動していたイギリスの極東艦隊は1971年10月をもって解散し、英海軍が太平洋地域から撤退することが決定していた。また、ベトナム戦争への介入が泥沼化したアメリカは撤退を模索しており、その後のアジアにおける米軍の展開の見通しは不透明であった。このような英米不在の状況を念頭に、トルドーは次のように述べたと伝えられる。「誰が空白を埋めるのか」。「もしアメリカがアジア海域における軍事力と影響力を弱めるならば、日本には軍事力を増大させる動機や誘惑が生まれる。日本はアジアで巨大な経済的投資をしているのだから、その支えとなる国際秩序と軍事部隊を必要とするだろう」⁶⁶。この発言は日本政府を刺激し、内外のメディアもこれを大きく報じた⁶⁷。

このような過程を経て、トルドーは5月25日午後5時、最後の目的地となる日本に到着した。羽田空港では佐藤栄作首相が海兵隊とともに一行を出迎えた。同夜には公式晩餐会、翌日には天皇皇后謁見の機会が設けられており、日本政府が最大級の格式をもってカナダ首相を厚遇したことがうかがえる。

5月26日には日加首脳会談が開催され、多岐に渡る問題について協議が交わされた。中国問題に関する意見交換では、トルドーは中国の台湾支配に関する主張は認めないとの立場を明確に表明した⁶⁸。またトルドーは、アジアに軍事的空白ができた場合の日本の役割について質したが、これに対して佐藤は日本が経済力でアジアの繁栄に努める旨を強調し、日本の軍国主義化を明確に否定した⁶⁹。懸案の経済問題については、トルドーはカナダ製品の日本参入の阻害要因である関税と輸入量規制の軽減を佐藤が確約したことを明言している⁷⁰。カナダにとっては一定の成果が得られたものと言える。政治的協議に関わる日程を終え、トルドーは同日中に万国博開催地である大阪へ向かった。

4 ナショナル・デーのカナダ

(1) カナダ館の理念

日本万国博覧会において、カナダは「発見 (Discovery)」を展示の基本テーマとして掲げた。公式ガイドによれば、このテーマは「カナダという国をよく理解してもらおうという意味と、探検家によって発見された国土で新しい生き方を発見しながら進んできたカナダ人気質が、いまま産業・科学・芸術など、あらゆる分野に生きていること」⁷¹を訴えている。カナダ館の案内冊子では、多数の写真に「ふたつのカナダがある」という一文を繰り返し用いて「古い世界と新しい世界」「英仏とアメリカ」「太平洋の国と大西洋の国」「英語を話すカナダ人とフランス語を話すカナダ人」のように、カナダが様々な観点において異なる二つの要素から成り立つ国家であることを理解させようとした⁷²。

カナダが英仏両語を公用語とする二言語主義を確立したのは1969年であるが、そこに至るまでの委員会では「二文化主義 (Biculturalism)」も併せて検討されていた。最終的には1971年に多文化主義 (Multiculturalism) が採用されるが、この万国博の時点では二項対立の論理でカナダを表現しようとする姿勢に1960年代の名残がうかがえる。

「探検家」の役割を強調する一方で「先住民」への言及がないことも、現代の視点からは違和感を拭えない。カナダはモントリオール博では「インディアン・パビリオン」を建設して先住民自身の企画によりその文化を展示するという、画期的な成果を上げていた⁷³。日本万国博における後退は、1969年に白書を発表して先住民の同化を推進しようとしていた当時のカナダの政策を想起させる。

カナダ館の建物は、外壁と屋根が一辺50 cm の鏡 4 万枚でタイル状に覆われ、ピラミッド型の頂点と四隅を切り取った形状で、「鏡の殿堂」と命名された。バンクーバー出身の建築家エリクソン・マッセイ (Erickson



カナダ館（外観）

写真提供：大阪府

Massey) のデザインによるもので、とくに若い人の好みに合わせて設計されており、鏡が大空を写しだすことで雄大で美しいカナダの風物を象徴しているとされる⁷⁴。

館内は6つに区分され、第1会場（テーマへの導入）、第2会場（国土）、第3会場（ブリッジング）、第4会場（都市環境）、第5会場（社会環境）、第6会場（伝統と発見）という内容で構成された。各会場ではカナダの歴史や地理など6分間の映像上映による説明があり、それらを過ぎた後に展示場が配置された。コンピュータが「赤毛のアン」のシルエットを映し出し先住民のマネキンや北極グマの剥製が置かれるなど、「日本人が知るカナダ」⁷⁵のイメージが強く打ち出された。また、バンクーバーの人気バンドであるザ・コレクターズ（The Collectors）の作曲と演奏による音楽が流され、カナダ

における流行を伝えた。また、中庭ステージでは、フランス系カナダ人を中心とする民族舞踊団フ・フォレ (Les Feux Follets) の公演とアイススケートショーが会期中を通じて催され、フォーク、ロック、ポップ、シャンソンの人気歌手やグループが入れ替わり立ち替わり来日して一定期間出演した。このような展示構成やプログラムから強くうかがえるのはカナダが「若さ」を訴えようとする姿勢である。

日本万国博を通じたプレゼンス増大というカナダの意図は、来館者の案内態勢に端的に表れている。「ホスト」「ホステス」と称される案内役のスタッフはカナダ人27名、日本人16名の計43名が配置された。カナダ人スタッフは、英語、フランス語、日本語及び他の言語を話すマルチリンガルで、日本人スタッフはカナダ現地での研修により体験に基づいてカナダを説明できるように訓練されていた⁷⁶。日本万国博は公式には日英両語が通じる前提であり、外国人観光客を念頭に、ホテルニューオータニが宿泊者に万国博のテレビ番組を英語で提供するなど⁷⁷、開催国である日本の側にも、会場外も含めて英語によるサービスを重視する姿勢があった。しかし、多くの外国館はそのような意識が希薄で、スタッフは日本人中心で英語話者は少数にとどまり、概して日本語以外は通じにくかった。「アメリカン・パーク」の売り子は日本人でアメリカ人の姿はまばらであり、英国館など一部のパビリオンではパンフレットが日本語版しか提供されていなかったという⁷⁸。これは、日本人観光客を中心にイベント自体の盛況を主眼に置いた諸国と、それ以上のものを目指したカナダとの相違と言えらるだろう。

カナダ政府が日本万国博参加のために要した費用は推定1120万カナダドルであり、ナショナル・デーに関わる費用がそのうちの50万ドルを占めた。ナショナル・デーの催しにおいても他国との差異化は明確に意識され、それは「エンターテインメントは最大限、スピーチは最小限」という方針に端的に表れた⁷⁹。トルドー首相の式典挨拶に割り当てられた時間は、萩原徹・日本政府代表とともにわずか3分ずつで、トルドーはきわめて限定された時間内

で効果的なメッセージを発することが求められることとなった。

(2) トルドーのメッセージ

カナダのナショナル・デーにはトルドー首相以下総勢400名余のカナダ人の参加が見込まれていた。これはナショナル・デーの催しとしては開幕以来最大級の規模となる見通しであること、カナダが日本万国博への参加を最初に決定した外国として高い好感度をもって受け止められていることなどを、当時のカナダのメディアは期待を込めて報じている⁸⁰。当日のトルドーの日程は表2のように定められた。

表2 トルドーのカナダ・ナショナル・デー日程

5月27日 9:25 カナダ館視察 — 10:15 お祭り広場着 — 10:35 首相挨拶
— 11:38 退場 — 11:55 日本館視察 — 12:30 迎賓館着 — 12:45-14:15
歓迎午餐会 — 14:20 オンタリオ州館視察 — 15:00 ブリティッシュ・コロ
ンビア州館視察 — 15:35 ケベック州館視察 — 16:10 カナダ館着 夕食 —
17:00-20:00 米国館、ソ連館、チェコスロヴァキア館、英国館を訪問 —
21:30 迎賓館着 リード政府代表主催のレセプションに出席 — 22:00 迎賓
館発 ロイヤル・ホテルへ

『日本万国博覧会公式記録資料集別冊H 式典および要人の訪問』pp. 168-169より作成

トルドーは式典挨拶⁸¹の冒頭で、まず日本万国博を讃えて「博覧会の精神、活力、色彩、熱意等すべて前回の万国博覧会に表現されたものが再現されました」と述べると、「1970年万国博覧会は1967年万国博覧会に直接つながるもの」との認識を示した。そして、それがアジアで開催されていることは日本国民にとって重要であるとともに「カナダ国民にとっても同様に重要性を感じ、誇りがもてる点」であると述べた。先のモントリオール博では、過去に欧米で開催された万国博の伝統を引き継ぎながらも、植民地主義を脱却し、カナダの独自色を随所に打ち出しつつ万国博の新しい形が打ち出された。その継承を強調して日本万国博を評するレトリックには、やや強引ながら、自

国民の誇りを喚起しつつ日本とカナダを同じ視点に据えようとする意図がうかがえる。

「一人のカナダ人として、私は、皆さんが太平洋を東から西へと横断して、清新ではあるがとらえどころのない若さをこの会場に持ち込むことができたことを喜んでおります」。「アジアを極東として考えるべきではないと思います」。「長い経路をたどって接近しようとする場合には、日本はカナダの東にあるといえます。しかし、いまこそ、直接的なルートをとるべき時がきたのです」。歴史を振り返れば、カナダの視点は常に東を向いていた。トルドーは、日本に対する認識の転換を述べることで、日加関係の深化への期待はもとより、カナダにとっての新時代が到来したことを訴えた。

トルドーのメッセージは、突き詰めれば次の箇所に収束すると言えるだろう。「今後、カナダ人は、太平洋の対岸を、ヨーロッパでの出来事やヨーロッパの歴史家の見方を通じてではなく、カナダ人自身の立場から見るべきです」。「われわれは、カナダ人と日本人とは、一つの大洋を隔てて相互に向き合って位置していることを理解すべきです」。「日本と太平洋岸の諸国は、カナダ人にとっては極東ではなく『カナダの新しい西方』(not as the Far East but as our New West) として取り扱われるようになることを望みます」⁸²。地域としての West (西部) に「未開と文明の接点」⁸³としてのフロンティアを見出し自国発展の可能性の象徴とする見方は、19世紀アメリカの歴史学者フレデリック・ジャクソン・ターナー (Frederick Jackson Turner) がアメリカ発展の説明に用いて注目されたレトリックであるが、その後のカナダ史でも West (西部) は発展の礎と辺境という両面を持った。その意味で、この West を「西方」とした公式記録の翻訳は、日本語表現としての若干の不自然さを差し置き、周到と言えるものである。

カナダの外交は連邦結成以来、英米加の三者から成る「北大西洋三角形」を基本的枠組みとして捉えられてきた。大筋では加英関係から加米関係への重点の移行を基調としつつ、第二次世界大戦時には英米の仲介役も担いもし

た。トルドーの言葉は、大西洋を舞台とする欧米との関係を外交の基盤とするのではなく、太平洋地域にアジア諸国との新しい関係を築くことにカナダの未来を見出そうとする姿勢を表している。ただし、「極東」を「新しい西方」と言い換えるレトリックは必ずしも手放しで称賛されたわけではない。カナダのメディアでは、日付変更線を隔てて一日の開始を先に迎える日本を「西」と呼ぶことへの疑問やカナダ西部も「東」となることへの違和感、日本がカナダを「東」と捉えるかという疑念なども呈されている⁸⁴。

最後にトルドーは、「人間もようやくその世界を理解しはじめるところまでできた」と前置きしたうえで「人間はこの壮大な会場から、きっと前進の一步を踏み出し（中略）『全人類のための進歩と調和』を達成するに至るであろう」と述べている。「人間とその世界」というモントリオール博の理念が日本万国博の理念に達成をみるというレトリックにより二つの博覧会の連続性を改めて強調して、挨拶は終了する。「進歩と調和」のフレーズで表される理念は、多元的な価値の尊重に基づく社会建設を目指して翌年に多文化主義を打ち出すトルドー政権の姿勢とも合致するものであった。

(3) カナダ文化とトルドーマニア

カナダのナショナル・デーとなった5月27日の万国博会場は「お祭り広場を中心にカナダ一色で塗りつぶされた」⁸⁵と報じられている。式典の様子はカナダ放送協会が衛星生中継によりカナダでテレビ放映した。

その後長時間にわたるショーの冒頭でモントリオール博のテーマソング「カナダ（100周年の歌）」が作曲者ボビー・ギンビー（Bobby Gimby）を先頭に入場行進したカナダと日本の子供たちによって歌われたことは、前回博覧会との連続性を示唆する演出であった。その後は民族舞踊、フォーク音楽、ジャズ・シャンソン、アイススケートなどが続き、カナダ騎馬警察（RCMP）によるミュージカルライドまで多彩なショーが繰り広げられた。最後は出演者と観客が入り混じってゴーゴーを踊り、会場はロック・フェスティバルの

ような雰囲気となった⁸⁶。夜には万国博ホールでミュージカル『赤毛のアン』が上演された。

ナショナル・デーのプログラムは、カナダを若く活力のある国として描き出すため、戦略的に用意された。このことに関して注目されたのは、カナダ国立バレエ団のナショナル・デー出演が直前になり急遽見送られたことである。リード・カナダ政府代表は、起用撤回の理由として、プログラム全体が持つ若さの発露と調和するよう『白鳥の湖』以外の演目を求めたがバレエ団に拒否されたことを挙げた。バレエ団側は、カナダのエンターテインメントのクラシックな側面を抑圧するこの措置を「裏返しの俗物根性」と非難した⁸⁷。若さや新しさを強調する戦略がカナダ文化の一面を切り捨てる結果を生んだことは否めない。

これらの文化的コンテンツと並び注目を集めたのはトルドーの存在である。トルドーは、1960年代になってようやく現れた、初の20世紀生まれの首相であった。カナダ国民は連邦結成100周年とモントリオール博覧会により生まれた好感情の雰囲気が継続することを望み、それを体現したのがトルドーであった⁸⁸。1968年に首相に就任したトルドーの人气がカナダ中を席卷した現象は「トルドーマニア (Trudeaumania)」と呼ばれるが、その勢いは1970年に入っても衰えていなかった⁸⁹。

独身で奔放な私生活を送っていることで知られるトルドーを、この太平洋諸国歴訪では他国メディアも好奇の目で追いかけた。ニュージーランドで周囲からの求めに応じて女性モデルとベッドの上で記念写真に収まったり⁹⁰、オーストラリアのナイトクラブでダンスを楽しんだり⁹¹、香港で中国人女性とともに宿舎に帰ったり⁹²、といったゴシップ紛いの記事が連日各国の紙面を賑わせた。来日時には「さっそうと来日」⁹³と報じられた。日加首脳会談後に保利茂官房長官がこれを「伊達男と団十郎の名優対決」⁹⁴と評したことは、トルドーが佐藤の老練さに譲ることなく個性を遺憾なく発揮した印象を強めている。

ナショナル・デーの公式訪問を終えたトルドーは、5月28日午前には非公式に再び会場を訪れ、リード政府代表の案内により博覧会を見学し、住友童話館、富士グループ館、三菱未来館も訪問している⁹⁵。この日はブリティッシュ・コロンビア州のスペシャル・デーでもあった。同日の京都観光では、妙心寺で茶席と懐石料理を楽しみ、仏教哲学者と対話して東洋宗教への関心を満たした後、下鴨神社で蹴鞠を見学している⁹⁶。滞在最終日となる5月29日には、日銀総裁及び財界の要人と昼食をとりながら日本式経営や対外援助について意見交換した後、在日カナダ大使館で少年野球の試合に立ち合った。最後は講道館で柔道の手合わせを行い、名誉黒帯を授与された後、帰国の途に就いた⁹⁷。トルドーが去ると外国メディアの大半は日本を離れ、外国人記者センターは閑散としたという⁹⁸。会期中を通じて取材を続ける外国メディアは稀であった。

結 び

1960年代から70年代にかけて、万国博覧会は性格的に大きな変貌を遂げた。国際博覧会条約の1972年改正は、植民地に関わる文言を規定から一掃し万国博から植民地主義を排除したという意味で抜本的なものであった。そして、その改正を待たずモントリオール万国博では、主催国カナダが新興独立国を参加国として迎え入れるためにとくに積極的なイニシアチブを発揮したとされる⁹⁹。日本万国博覧会は、そのような万国博の過渡期に開催された。

カナダ政府は日本万国博覧会を自国開催のモントリオール万国博の後継イベントと位置付け、早期から積極的に関与した。カナダ自身の事情としては、このことは日加経済関係の深化とも相まって、国内における日本への関心を高めるとともに日本のイメージを変化させる機会を早くから提供することに、直接的に寄与した。アルバータ大学のエクステンション学部は、万国博に出かける旅行者へのオリエンテーションとして日本の歴史、言語、宗教、芸術、哲学、習慣などに関する講座を開講している¹⁰⁰。日本万国博の影響が、日本

の話題がメディアに多く登場するようになったことには留まらないことを示す一例である。

日本万国博におけるカナダの卓越した存在感は、カナダに無縁だった多くの一般的日本人にその存在を思い起こさせた。会期中のプログラムは、日本人にとっては通常は知ることさえ稀な、同時代のカナダのポピュラーカルチャーに触れる機会を提供した。その意味で、万国博はたしかに同時代のカナダの一面を伝え、日本国内におけるカナダのプレゼンス向上に一定の成果をもたらしたと言える。ただし、カナダ騎馬警察のミュージカルライドや『赤毛のアン』の公演といったエンターテインメントは、多文化社会の現実を伝えるには無力であり、カナダのステレオタイプを強化する方向に働いた¹⁰¹との評価も存在する。

日加両国間の相互理解や文化交流は1970年代以降着実に進歩し、とりわけ学術分野における交流は活発化した。トルドー政権は1974年に日本との学術交流プログラムを開始し、また翌年からは主要領事館を文化交流の拠点とする政策を推進し、学術交流及び舞台芸術やスポーツを通じて日本との文化的関係を深化させるうえで有益であった¹⁰²。1980年に設立された学際的学術団体である日本カナダ学会（Japanese Association for Canadian Studies）の設立当初においては、在日カナダ大使館の支援は大きかった。日本側でも、トロントの日本領事館は日本関係の参考資料や日本映画をカナダの図書館に提供することに努め、国際交流基金（Japan Foundation）はトロント日本文化センターを開設した¹⁰³。これらの事象は、日本万国博との直接的な帰結とは言えないが、それと軌を一にしている。

日本万国博は日加交流の促進に一定の役割を果たした一方、その先にトルドーが見据えていたカナダの太平洋国家としてのアイデンティティー確立は、期待したほどに評価されたとは言い難い。その理由は、北大西洋条約機構（NATO）に代表される条約上の国際関係に裏付けられていた大西洋地域とは異なり、太平洋地域が共同体としての実質を伴っていなかったことにある。

そのことから当時の論評は、この時点での太平洋は「地域」でなく「方向」にすぎなかったとする¹⁰⁴。APEC（Asia Pacific Economic Cooperation：アジア太平洋経済協力）が12か国の参加により発足するのは1989年のことである。加米日の関係について言えば、ソ連の崩壊と冷戦の終結によりアメリカの関心が経済的、社会的な問題に向けられるようになり、太平洋地域における国際関係は重要性を増した¹⁰⁵。時期尚早であったとはいえ、カナダが1970年の時点で太平洋を地域として認識する視点を持ち、日本万国博をその推進の好機としたことは注目に値する。

「20世紀はカナダとカナダの発展の世紀となるであろう」¹⁰⁶とは、世紀当初に活躍した第8代首相ウイルフリッド・ローリエ（Wilfrid Laurier）が演説で多用し、カナダ史では広く知られる言葉である。その20世紀後半、日本万国博覧会は、経済発展の只中にある日本の台頭を象徴した。それは、新たな発展に向けて2世紀目を踏み出したカナダにとっては、モントリオール博の延長線上で、日本との相互理解を促進するとともに新たな国家アイデンティティーを確立するためのよすがとなったのである。

註

- 1 外務省「日本における万国博覧会」<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/hakurankai/nihon.html>（accessed January 25, 2022）
- 2 大阪府日本万国博覧会記念公園運営審議会「日本万国博覧会記念公園の活性化に向けた新たな将来ビジョン（答申）」2022年9月12日，2.
- 3 国際博覧会に関する学術研究の現況や動向は、下記の文献などから知ることができる。佐野真由子編『万博学—万国博覧会という、世界を把握する方法』（思文閣出版，2020年）。また、戦後日本における万国博覧会の諸相を社会史的視点から検証したものとして、下記の文献がある。吉見俊哉『万博と戦後日本』（講談社，2011年）。
- 4 佐野真由子「序」、佐野真由子編『国際研究集会「万国博覧会と人間の歴史」報告書』（国際日本文化研究センター，2017年）6.
- 5 下記の文献では日本における万博研究の課題に言及されている。大阪大学21世紀懐徳堂編『なつかしき未来「大阪万博」—人類は進歩したのか調和したのか』

- (創元社, 2012年), 138.
- 6 下記の文献は1967年モントリオール博覧会についてカナダ研究の視点からみた論考として重要である。溝上智恵子『ミュージアムの政治学—カナダの多文化主義と国民文化』(東海大学出版会, 2003年)。
 - 7 佐藤栄作・日本万国博覧会名誉会長(内閣総理大臣)、萩原徹・日本万国博覧会日本政府代表、石坂泰三・日本万国博覧会協会会長がいずれも「万国博」「日本万国博」の語を用いていることは、その典型である。日本万国博覧会公式ガイド作成委員会編『日本万国博覧会公式ガイド』(日本万国博覧会協会, 1970年), 5-7. この傾向は民間でも同様で、「万博を成功させよう!! 日本万博に協力する」と謳った大日本印刷の雑誌広告などもあるが少数派である。『デザイン』99, 「EXPO'67 カナダ万国博—モントリオール」(美術出版社, 1967年7月号増刊), 94.
 - 8 国際博覧会条約の整備と博覧会国際事務局の設立の経緯については、下記の文献が詳しい。岩田泰「国際博覧会の歴史に博覧会国際事務局(BIE)が果たした役割」佐野真由子編『万博学』, 131-146.
 - 9 加盟日の2月8日という日付は、外務省など複数の日本政府のサイトに依拠している。博覧会国際事務局のサイトは、日本の加盟日を1月8日と記している。なお、後述の1940年の博覧会の計画時には、日本は国際博覧会条約に調印していたが未批准であったため、非加盟国であった。
 - 10 吉見俊哉, 62.
 - 11 カナダ館完成までの時系列の詳細については、主として下記の資料に依拠している。カナダ政府 EXPO'70 委員会「EXPO'70 カナダ館 カナダ館のこれまで」, 1-2.
 - 12 『朝日新聞』1966年10月7日夕刊, 2.
 - 13 *Ottawa Citizen*, May 28, 1968, 32.
 - 14 「近づく万国博 野心的なカナダ展示館」『朝日新聞』1969年1月3日, 9.
 - 15 カナダ政府 EXPO'70 委員会「EXPO'70 カナダ館 資料I カナダ館のあらまし」(日本万国博覧会参加館資料)1969年, 2.
 - 16 参加状況が改善した事情の詳細については次を参照。吉見俊哉, 85-89.
 - 17 博覧会の開催間隔が短いことは、必然的に、準備に関する時間的制約という問題を生じたため、1972年には BIE の特別委員会で開催頻度が論点となり条約の大改正が行われている。岩田泰「国際博覧会の歴史に博覧会国際事務局(BIE)が果たした役割」佐野真由子編『万博学』136-138.
 - 18 吉見俊哉, 67-82. 平野暁臣『大阪万博—20世紀が夢見た21世紀』(小学館, 2014年)176-187; 五月女賢司「一九七〇年大阪万博の基本理念—『万国博を考

- える会』による草案作成の背景と経緯」佐野真由子編『万博学』, 246-265.
- 19 カナダ政府 EXPO'70 委員会「EXPO'70 カナダ館 担当スタッフのプロフィール」(日本万国博覧会参加館資料), 1969年.
- 20 日本万国博覧会協会編『日本万国博覧会公式記録資料集 別冊 E-1 運営委員会会議録』(日本万国博覧会協会, 1971年), 1-3.
- 21 前掲書. 及び『別冊 E-2』『別冊 E-3』『別冊 E-4』.
- 22 「第5回日加閣僚委員会共同コミュニケ」(外務省訳) 1969年4月18日. <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/bluebook/1970/s44-3-1-3.html>
- 23 日本万国博覧会協会編『日本万国博覧会公式記録資料集 別冊 H 式典および要人の訪問』(日本万国博覧会協会, 1971年), 336.
- 24 John Roderick, "Canadian Pavilion a Pre-Expo 70 Hit," *Ottawa Citizen*, February 25, 1970, 56.
- 25 The Canadian Corporation for the 1967 World Exhibition, *Expo 67 Official Guide*, (Toronto: Maclean-Hunter Press, 1967), 28.
- 26 日本万国博覧会協会編『モントリオール万国博覧会年次報告書 1963年～1967年』(日本万国博覧会協会, 1969年), 300.
- 27 George Bowering, *Stone Country: An Unauthorized History of Canada*, (Toronto: Penguin Canada, 2003), 286.
- 28 Asa McKercher, *Canada and the World since 1967* (London: Bloomsbury Academic, 2019), 162.
- 29 Bill Cotter, *Montreal's Expo 67*, (Charleston, SC: Arcadia, 2016), 8.
- 30 *Expo 67 Official Guide*, 68.
- 31 *Ibid.*, 36-37.
- 32 日本万国博覧会協会編『1967年カナダ・モントリオール万国博覧会参加概要』(日本万国博覧会協会, 出版年不詳 1968年?), 17-18.
- 33 *Expo 67 Official Guide*, 108.
- 34 Frank Moritsugu, "Japan Hits, But Misses," *Montreal Star*, May 15, 1967, 10.
- 35 Frank Moritsugu, "Princely Informality Captivates the Crowd," *Montreal Star*, July 13, 1967, 9.
- 36 Sandra Dolan, "Japan Brings Charm to Expo Ceremonies," *Gazette* (Montreal), July 13, 1967, 17.
- 37 歌舞伎公演の詳細については、下記の資料を参照。日本貿易振興会『カナダ・モントリオール万国博覧会参加報告書』(日本貿易振興会, 1969年), 126-133.
- 38 Audrey M. Ashley, "Four Hundred Year of Kabuki Drama," *Ottawa Citizen*, August 4, 1967, 20.

- 39 Moritsugu, *Montreal Star*, May 15, 1967, 10.
- 40 “Japan at Expo,” *Montreal Star*, July 7, 1967, 29.
- 41 Moritsugu, *Montreal Star*, May 15, 1967, 10.
- 42 標的「万国博の日本館」『朝日新聞』1967年7月1日（夕刊）、9.
- 43 Reuter, “Japan Exhibit Criticized by Official,” *Gazette* (Montreal), July 19, 1967, 14.
- 44 Reuters, “Japan Plans to “Improve” Its Pavilion,” *Montreal Star*, August 4, 1967, 26.
- 45 “Japan Stages Fashion Show,” *Montreal Star*, August 30, 1967, 28. 新聞報道を追う限りでは、着物が見られないことへの不満は時期の異なる複数の記事に見られるが、モントリオール博の公式ガイドには日本館の案内として「レストランでは着物を着たウェイトレスが給仕する」との記述がある。*Expo 67 Official Guide*, 108.
- 46 Francean Campbell, “Japanese Pop Singer,” *Montreal Star*, September 15, 1967, 33.
- 47 日本貿易振興会『カナダ・モントリオール万国博覧会参加報告書』84.
- 48 同上.
- 49 “Expo a Training-ground for Next Show in Japan,” *National Post*, July 1, 1967.
- 50 Harry Stockwin, “On to Expo '70,” *Ottawa Citizen*, February 15, 1968, 7.
- 51 芦原義信「モントリオール・日本館を設計して」『デザイン』99, 45.
- 52 「現地の印象 丹下健三氏に聞く」『デザイン』99, 51-52.
- 53 同上.
- 54 吉見俊哉, 79.
- 55 Pierre Elliott Trudeau, Interview with Jay Walz, *New York Times*, November 22, 1968, quoted in Pierre Elliott Trudeau, *Against the Current: Selected Writings 1939-1996*, ed. Gérard Pelletier (Toronto: McClelland & Stewart, 1996), 295-296.
- 56 Thomas S. Axworthy and Pierre Elliott Trudeau eds., *Towards a Just Society: The Trudeau Years*, (Toronto: Penguin Canada, 1990), 75.
- 57 カナダは中国との交渉過程をアメリカに伝えていたが、アメリカは対中交渉に関する情報をカナダに伝えなかったため、カナダはアメリカと協議することなく、アメリカの意向とは無関係に独自に中国承認政策を進めた。櫻田大造『カナダ外交政策論の研究—トルドー期を中心に』（彩流社、1999）、465-466.
- 58 Secretary of State for External Affairs, *Canada, Pacific: Foreign Policy for Canadians* (Ottawa, June 25, 1970), 6.

- 59 “Canada under Trudeau: New Identity for Our Closest Ally?” *Great Decisions*, 1969, 21.
- 60 「各国代表にきく 太平洋経済委 A. C. ウォルフ」『朝日新聞』1970年5月23日(夕刊), 2.
- 61 John W. Holmes, “Canada and the Pacific,” *Pacific Affairs* 44, no. 1 (1971): 7.
- 62 Lorne Kavic, “Canada-Japan Relations,” *International Journal* 26, no. 3 (1971): 576.
- 63 Charles Lynch, “Canadian Presence Lacking,” *Ottawa Citizen*, May 9, 1970, 7.
- 64 第1回政府代表会議(1968年5月)における万国博協会麻事業部長による説明。『日本万国博覧会公式記録資料集 別冊H』, 2.
- 65 『日本万国博覧会公式記録資料集 別冊H』, 23. なお、それ以外の場合には万国博への貴賓の訪問は非公式訪問となることも定められている。
- 66 John Walker, “PM Sees Japan Far East Power,” *Ottawa Citizen*, May 23, 1970, 1.
- 67 「『軍国日本』米より脅威 トリユドー・カナダ首相語る」『朝日新聞』1970年5月24日, 7.
- 68 AP-Reuters, “China’s Claim over Formosa Not Recognized,” *Ottawa Citizen*, May 26, 1970, 13.
- 69 「日本の“軍国主義化” 佐藤首相強く否定」『朝日新聞』1970年5月27日, 2.
- 70 John Walker, “Japan to Ease Tariffs,” *Ottawa Citizen*, May 26, 1970, 13.
- 71 『日本万国博覧会公式ガイド』, 55.
- 72 ピーター・デバラ編『カナダ』(日本万国博覧会参加館資料)1969年.
- 73 このことについて詳細は下記の文献を参照。溝上智恵子, 131-149.
- 74 カナダ政府 EXPO’70 委員会「ようこそカナダ館へ」(日本万国博覧会参加館資料), 1969年.
- 75 “What Canada’s up to at Expo,” *Ottawa Citizen*, April 25, 1970, 81.
- 76 カナダ政府 EXPO’70 委員会「EXPO’70 カナダ館 カナダ館のあらまし」(日本万国博覧会参加館資料)1969年.
- 77 “Bilingual System at New Otani,” *Ottawa Citizen*, April 4, 1970, 26.
- 78 Don McGillivray, “Expo ’70 Reveals Progress—and Rivalry of Nations,” *Ottawa Citizen*, August 29, 1970, 7.
- 79 “Maple Leaf Invasion,” *Ottawa Citizen*, May 23, 1970, 1.
- 80 John Roderick, “Canadian Pavilion a Pre-Expo 70 Hit,” *Ottawa Citizen*, February 25, 1970, 56.
- 81 Pierre Elliott Trudeau, Speech on Canada National Day at the Japan

- Exposition, May 27, 1970. トルドーの首相挨拶の引用はすべて下記の資料に基づく。日本万国博覧会協会編『日本万国博覧会公式記録資料集 別冊 I ナショナルデー・スペシャルデースピーチ集』（日本万国博覧会協会, 1971年）, 138-139.
- 82 英語の文言は下記の文献による。Miki Iwasaki, "Japan-Canada Relations in Perspective," in *Canada-Japan: Policy Issues for the Future* ed. K. Lorne Brownsey (Halifax, NS: Institute for Research on Public Policy, 1989), 74.
- 83 Frederick Jackson Turner, "The Significance of the Frontier in American History," in *The Frontier in American History* (New York: Henry Holt, 1920), 3.
- 84 Charles Lynch, "East Is West Is ... ?" *Ottawa Citizen*, May 29, 1970, 7.
- 85 「会場はカナダ一色」『朝日新聞』1970年5月27日（夕刊）, 10.
- 86 John R. Walker, "The Show (and Not Pierre) Was the Thing at Expo 70," May 27, 1970, 1.
- 87 "National Ballet Exposed," *Ottawa Citizen*, May 25, 1970, 12.
- 88 Bryan D. Palmer, *Canada's 1960s: The Ironies of Identity in a Rebellious Era*, (Toronto: University of Toronto Press, 2009), 175.
- 89 "Trudeaumania is Alive and Well in Chicoutimi," *Ottawa Citizen*, February 9, 1970, 13.
- 90 「モデル嬢とベッドに “ハンサム首相” のおチャメぶり」『朝日新聞』1970年5月17日, 7.
- 91 「トリュドー・カナダ首相 イキな生活 手堅い施策」『朝日新聞』1970年5月23日, 6.
- 92 John R. Walker, "Trudeau's Pacific Odyssey near Its Climax," *Ottawa Citizen*, May 25, 1970, 23.
- 93 ニュース抄録「さっそうと来日」『朝日新聞』1970年5月26日, 1.
- 94 「だて男と団十郎 名優対決」『朝日新聞』1970年5月27日, 2.
- 95 『日本万国博覧会公式記録資料集 別冊H』, 168-169.
- 96 John Walker, "Tea, Tea, Zen, Tea—a Pleasant Day," *Ottawa Citizen*, May 28, 1970, 25.
- 97 John Walker, "Trudeau's Judo," *Ottawa Citizen*, May 29, 1970, 50.
- 98 Robert Melcalfe, "Trudeau Leaves Expo Empty," *Ottawa Citizen*, June 3, 1970, 6.
- 99 佐野真由子「万国博覧会と『植民地』の消滅—国際博覧会条約一九七二年改正を中心に」万博研究会編『万博学／Expo-logy』創刊号, (思文閣出版, 2022年), 6-10.
- 100 "Expo Course," *Ottawa Citizen*, January 5, 1970, 2.

- 101 Kavic, 580.
- 102 Marie-Josée Therrien, "Canadian Chanceries in Tokyo," in *Contradictory Impulses: Canada and Japan in the Twentieth Century*, ed. Greg Donaghy and Patricia E. Roy (Vancouver: UBC Press, 2008), 232.
- 103 Ibid., 231.
- 104 Holmes, 17.
- 105 Michael Fry, John Kirton, and Mitsuru Kurosawa, "The New North Pacific Triangle," in *North Pacific Triangle: The United States, Japan, and Canada at Century's End* ed. Michael Fry, John Kirton, and Mitsuru Kurosawa (Toronto: University of Toronto Press, 1998), 3.
- 106 Wilfrid Laurier, Campaign Speech (Massey Hall, Toronto, October 14, 1904).

参考文献

- The Canadian Corporation for the 1967 World Exhibition. *Expo 67 Official Guide*. Toronto: Maclean-Hunter Press, 1967.
- "Canada under Trudeau: New Identity for Our Closest Ally?" *Great Decisions*. 1969. 13-24.
- Secretary of State for External Affairs, *Canada, Pacific: Foreign Policy for Canadians*, 1970.
- Axworthy, Thomas S. and Pierre Elliott Trudeau eds. *Towards a Just Society: The Trudeau Years*. Toronto: Penguin Canada, 1990.
- Trudeau, Pierre Elliott. *Against the Current: Selected Writings 1939-1996*. Edited by Gerard Pelletier. Toronto: McClelland & Stewart, 1996.
- 『デザイン』99, 「EXPO'67 カナダ万国博—モンリオール」美術出版社, 1967年7月号増刊.
- 日本万国博覧会協会編『1967年カナダ・モンリオール万国博覧会参加概要』日本万国博覧会協会, 出版年不詳 1968年?
- 日本万国博覧会協会編『モンリオール万国博覧会年次報告書 1963年~1967年』日本万国博覧会協会, 1969年.
- 日本貿易振興会『カナダ・モンリオール万国博覧会参加報告書』日本貿易振興会, 1969年.
- カナダ政府 EXPO'70 委員会「EXPO'70 カナダ館 カナダ館のあらまし」(日本万国博覧会参加館資料) 1969年.
- カナダ政府 EXPO'70 委員会「EXPO'70 カナダ館 カナダ館のこれまで」(日本万国博覧会参加館資料) 1969年.

- カナダ政府 EXPO'70 委員会「EXPO'70 カナダ館 担当スタッフのプロフィール」
(日本万国博覧会参加館資料) 1969年.
- カナダ政府 EXPO'70 委員会「ようこそカナダ館へ」(日本万国博覧会参加館資料)
1969年.
- デバラ, ピーター編『カナダ』(日本万国博覧会参加館資料) 1969年.
- 日本万国博覧会公式ガイド作成委員会編『日本万国博覧会公式ガイド』日本万国博覧会協会, 1970年.
- 日本万国博覧会協会編『日本万国博覧会公式記録資料集 別冊E-1 運営委員会会議録』日本万国博覧会協会, 1971年.
- 日本万国博覧会協会編『日本万国博覧会公式記録資料集 別冊E-2 運営委員会会議録』日本万国博覧会協会, 1971年.
- 日本万国博覧会協会編『日本万国博覧会公式記録資料集 別冊E-3 運営委員会会議録』日本万国博覧会協会, 1971年.
- 日本万国博覧会協会編『日本万国博覧会公式記録資料集 別冊E-4 運営委員会会議録』日本万国博覧会協会, 1971年.
- 日本万国博覧会協会編『日本万国博覧会公式記録資料集 別冊H 式典および要人の訪問』日本万国博覧会協会, 1971年.
- 日本万国博覧会協会編『日本万国博覧会公式記録資料集 別冊I ナショナルデー・スペシャルデー スピーチ集』日本万国博覧会協会, 1971年.
- 大阪府日本万国博覧会記念公園運営審議会「日本万国博覧会記念公園の活性化に向けた 新たな将来ビジョン (答申)」2022年9月12日.
- Bowering, George. *Stone Country: An Unauthorized History of Canada*. Toronto: Penguin Canada, 2003.
- Cotter, Bill. *Montreal's Expo 67*. Charleston, SC: Arcadia, 2016.
- Fry, Michael, John Kirton, and Mitsuru Kurosawa. "The New North Pacific Triangle." In *North Pacific Triangle: The United States, Japan, and Canada at Century's End* edited by Michael Fry, John Kirton, and Mitsuru Kurosawa, 3-13. Toronto: University of Toronto Press, 1998.
- Holmes, John W. "Canada and the Pacific," *Pacific Affairs* 44, no. 1 (1971): 5-17.
- Iwasaki, Miki. "Japan-Canada Relations in Perspective." In *Canada-Japan: Policy Issues for the Future* edited by K. Lorne Brownsey. 74-79. Halifax, NS: Institute for Research on Public Policy, 1989.
- Kavic, Lorne. "Canada-Japan Relations," *International Journal* 26, no. 3 (1971): 567-581.
- Palmer, Bryan D. *Canada's 1960s: The Ironies of Identity in a Rebellious Era*.

- Toronto: University of Toronto Press, 2009.
- McKercher, Asa. *Canada and the World since 1967*. London: Bloomsbury Academic, 2019.
- Turner, Frederick Jackson. "The Significance of the Frontier in American History," in *The Frontier in American History*. New York: Henry Holt, 1920.
- Therrien, Marie-Josée. "Canadian Chanceries in Tokyo." In *Contradictory Impulses: Canada and Japan in the Twentieth Century* edited by Greg Donaghy and Patricia E. Roy, 231-243. Vancouver: UBC Press, 2008.
- 平野暁臣『大阪万博—20世紀が夢見た21世紀』小学館, 2014年.
- 岩田泰「国際博覧会の歴史に博覧会国際事務局（BIE）が果たした役割」佐野真由子編『万博学—万国博覧会という、世界を把握する方法』思文閣出版, 2020年. 131-146.
- 溝上智恵子『ミュージアムの政治学—カナダの多文化主義と国民文化』東海大学出版会, 2003年.
- 大阪大学21世紀懐徳堂編『なつかしき未来「大阪万博」—人類は進歩したのか調和したのか』創元社, 2012年.
- 櫻田大造『カナダ外交政策論の研究—トルドー期を中心に』彩流社, 1999年.
- 五月女賢司「一九七〇年大阪万博の基本理念—『万国博を考える会』による草案作成の背景と経緯」佐野真由子編『万博学—万国博覧会という、世界を把握する方法』思文閣出版, 2020年. 246-265.
- 佐野真由子編『国際研究集会「万国博覧会と人間の歴史」報告書』国際日本文化研究センター, 2017年.
- 佐野真由子「万国博覧会と『植民地』の消滅—国際博覧会条約一九七二年改正を中心に」万博研究会編『万博学／Expo-logy』創刊号, 思文閣出版, 2022年. 2-28.
- 吉見俊哉『万博と戦後日本』講談社, 2011年.